

書 評

平岡昭利編著 『離島研究』 海青社、2003年、218p.
(英文タイトル Research into People, Life and Industry of Japanese Islands)

島嶼は経済学、社会学、民俗学など多くの専門分野で研究されてきたが、本書は地理学的研究がその総合性において極めて有効であるとの観点から、地理学者による研究をまとめたものである。編者をふくめた11名の地理学研究者が執筆した12章からなっている。

第2章以下は事例研究であるが、須山聡が執筆した第1章は島嶼地域・社会を存続・維持するためのシステムが、極めて多様で地域性を色濃く反映しているという観点から、島嶼の経済的性格にもとづいた体系的な類型化を試みたものである。具体的には人口構造および産業構造に関わる16の変数（データは2次統計であるが日本離島センター発行の『離島統計年報1998年版』による）について因子分析を行い、算出された各島嶼の因子得点を利用してクラスタ分析をほどこし、A 生業的漁業島嶼群（63）、B 自立的漁業島嶼群（62）、C 小規模中心地・製造業立地島嶼群（60）、D 農業特化島嶼群（38）、E 公共事業依存島嶼群（16）、F 観光化島嶼群（13）、G 鉱業特化島嶼群（5）の7つに類型化されている。括弧内の数字はそれぞれの類型に属する島嶼数であるが、人口50人未満の極小島嶼などを除いてあるので、対象になった島嶼数は257である。ここで「生業的」というのは自給自足的という意味であるが、本書でも生業を「なりわい」の意味で用いている

執筆者もいるので検討の余地がある。各類型の分布が考察され、たとえばAは人口規模が小さく、沿岸島嶼が多いのに対し、Bは瀬戸内海には比較的少なく玄界灘に24が集中している。対象島嶼のうち人口5000以上の大規模島嶼が27島あるが、利尻島を除く26島がC類型に属し、Dの分布は瀬戸内海西部、山口県の日本海側、九州北部、南西諸島に限られ、Eは、地震の復興利用が続いていた奥尻島以外はすべて本土から隔絶された離島であることなどが指摘されている。多くの島嶼地域は、ある程度自立的な生活圏を維持しつつ、多様性を示しているというのが須山の結論である。なお、須山は第3章において奄美大島の名瀬の郷友会の分析を行い、生活水準の向上にともなって出郷者の生活支援組織としての郷友会の役割は縮小したが、二世・三世にとっては自らのアイデンティティを確認する場としての意味が大きくなり、またモータリゼーションと道路整備の結果として、シマ住民と名瀬在住者の接触の機会が増大したという興味ある指摘を行っている。須山は明示的に述べてはいないが、郷土という地理的イマジネーションが、郷友会の活動という社会的実践をうみだしていることに注目した研究とみなすことも可能である。

離島における日常生活圏の最近10年間の変化は、第2章において石川雄一が本土からの距離

が25km以上の長崎県の離島について検討している。書籍・音楽CDの購入先としては、大型小売店の進出によって離島以外のシェアが低下したのに対して、通院に関しては福岡市、長崎市、佐世保市など離島以外の都市を志向する傾向が高まっている。住民の域内交流パターンの変化としては、新規中心地集中型と新規中心地分散型とがある。ライフヒストリーの分析（聴き取りによるだけではなく、船員手帳や漁船台帳などの資料も用いられている）を通じて、数十年間にわたる伊吹島からの漁民の移動が、第4章で川原典史によって考察されている。転業をとまなう移動を結果する情報源は、島出身者に限定されるわけではないが、伊吹島漁民の最大の移住先である泉佐野周辺については、連鎖移住の性格が強かった。島嶼出身者あるいは漁民の移動について何らかの一般化は非常に困難であるが、このような調査資料がたくさん積み上げられることがまず必要であろう。島からの移動ではなく外部からの移動というめずらしい事例が、第5章において、須山の分類によればFに属するダイビングの島である座間味島について、宮内久光によって報告されている。県外からの一時的移住者および定住性の高いヤマト嫁についての貴重なデータである。

本書の第Ⅱ部は「農業・牧畜の島々」と題され、賀納章雄による渡名喜島と栗国島のキビ栽培の復活、助重雄久による伊江島におけるキク、葉タバコ、肉用牛の生産、大呂興平による知夫里島における肉用牛繁殖経営についての3つの章から成っている。南島においては、渡名喜島と栗国島だけでなく八重山の島々においてもモチキビ栽培が復活・拡大しつつあり、その基礎には、畑作穀類栽培に対しての島民の思い入れあるいは伝統、そして農業従事者の高齢化が進

むなかで、キビが高齢者にも栽培しやすかったことが指摘されている。伊江島農業の3本柱となったキク・葉タバコ・肉用牛の場合、本土から島に戻ったUターン者の多くが運輸・造船・鉄鋼・自動車修理・電気工事などの免許や資格を持ち、これがユイマール現代版としてめざましい農業発展を可能にしたこと、さらに牛舎や農地が散在するなかで携帯電話が農作業の効率化に大きな役割を果たしたとのことなどが指摘されている。知夫里島の肉用牛繁殖経営の規模拡大を可能にした大きな要因としては、「牧畑」時代からの慣行で共同放牧地への放牧権が平等に与えられていることが注目されている。同時に、肉用牛繁殖経営への参入者が、勤務時間が流動的な左官業、ガス・ガソリン販売、漁業などの本業をもつものであることも、その将来との関連で重要な指摘である。

第Ⅲ部は「漁業・養殖の島々」で、田和正孝による越智諸島掠名における延縄漁業、山内昌和による小呂島における漁業経営組織の柔軟な再編と新しい技術導入による人口維持、中村周作による延岡市浦島の巻網業と養殖業、平岡昭利による家島諸島の3つの浦を対象にしての明治前期における集落間の異質性形成についての4つの章がある。4つの章のアプローチは、現代地理学のアプローチの多様性を反映するかのようにバラエティにとんでいる。田村は多くの地理学者が漁村に焦点をあてるのに対して、水域すなわち漁場利用形態の分析というアプローチをとっているし、山内は漁村の人口維持が、漁業経営とどう関係したかという問題意識から研究を展開し、新技術導入の連続性と経営組織の柔軟性に注目している。中村は、新しい時間地理学的分析によって操業における「能力の制約」、「管理の制約」、「結合の制約」を見いだそ

うとしている。先の須山の類型化によれば家島（宮と真浦）はCに、坊瀬島はBに属するが、平岡は史料の分析という歴史地理学的手法によって、家島本島における石船・商船などによる商品経済の発達、宮、真浦の漁業生産の相対的低下を招いたのに対し、交通的に隔絶されていた坊瀬浦においては、漁業・漁村的性格の温存から後に漁業の伸展を結果したことを結論している。

どの章も、「島嶼性」といういわば地理的条件を念頭においた分析であり、また地理学者として多くの執筆者が、島嶼あるいは集落間の差異化に注目しているが、地理学を「なりわい」としない研究者によっても、本書に収録された論文に匹敵するような研究がなされているのではないかということが、読後の率直な感想としてのこる。それを、社会・人文諸科学における空間論的転回と理解するか、それとも地理学の雑種性を示すものとみるかは、議論の分かれるところであろう。また島嶼研究において地理学者がオリジナルなアプローチを展開している分野が、自動車をはじめとする工業製品のリサイクル問題、災害問題など、まだまだあることも指摘されよう。（竹内啓一）